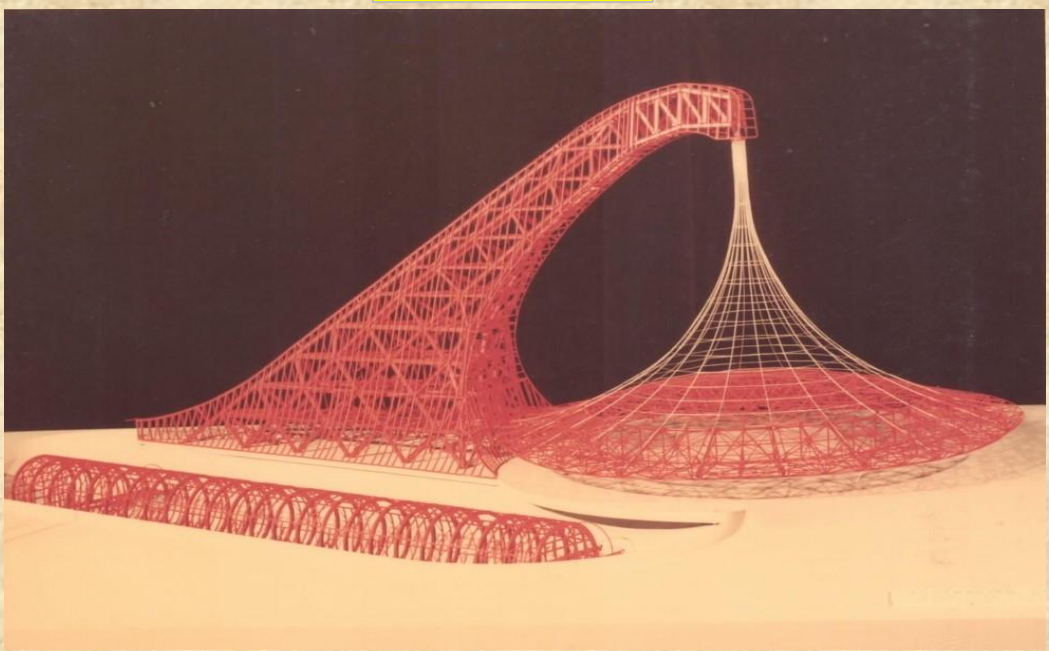
「旧いアルバム」より～

『EXPO'70　鉄骨建築記録写真集』その2

今回は、“その2”として、大阪万博で鉄骨部材の製作に携わった2つのパビリオン（オーストラリア館、古河館）の画像を掲示します。

オーストラリア館



オーストラリア館は、吊屋根構造になっていて、展示室の屋根の外側からアームを伸ばして吊り上げるという珍しい工法が用いられました。
その造形は、葛飾北斎の代表作の一つである「富嶽三十六景」の「神奈川沖浪裏」から着想しています。
テーマは、「人類の進歩と調和に対するオーストラリアの貢献」です。

清水建設
清水建設

古河館

古河館は、西暦764年に奈良の東大寺 大仏殿を挟んで東西に2つ建立された七重塔のうちの一つを模した造形となっていました。
東大寺の七重塔のうち「西塔」は平安時代に焼失し、「東塔」も度重なる戦や落雷などで焼失し、1362年以降は幻の存在となっていました。
伝聞によれば、建物の高さは86メートルで、最上部には金色に輝く相輪があったと云われています。
古河館は「古代の夢と現代の夢」をテーマとしたことから、このような造形になったものと思われます。
なお、古河館は万博後に取り壊されましたが、その“相輪”は東大寺に寄贈されていて、現在も東大寺 大仏殿回廊の東側に安置された姿を見ることができます。

ちなみに、大阪万博では、ビルマ館の造形も七重塔（高さ約26メートル）で、古河館の造形と被っていました。